

令和5年度 福岡県ノーリフティングケア普及促進事業
実践報告

入居者ファースト！職員ファースト！

～未来に届け！ノーリフティングケア～



介護付き有料老人ホーム 生の松原ハッピーガーデン

生の松原ハッピーガーデンで
なぜノーリフティングケアが必要なのか！

生の松原ハッピーガーデンは、

『**介護付き有料老人ホーム**』

一般（自立）居室
38部屋



介護居室
(特定施設入居者生活介護)
32部屋

シニアマンションとして
自由に生活していただいているが、
最近入居者の高齢化が進み、
生活にお手伝いが必要な方が増えている

職員配置⇒3：1（看護師8名、介護士14名）
看護師は24時間体制で配置している
平均介護度⇒2.6
平均年齢⇒入居者87.3歳、職員52歳

職員配置は、特定施設として稼働させている介護居室入居者に対して
3：1と手厚く配置はしているが、**入居者の高齢化、介護量の増加に加えて、
職員の平均年齢も高くなっている。**

さらに一般居室入居者のサポートが増え、人員不足が顕著になっている。
限られた人員で、身体的・精神的負担を軽減し、継続的に働いてける
環境づくりのために「ノーリフティングケア」の導入を決めた。

推進委員の取り組み

- 6月 福岡県ノーリフティングケア普及促進事業開始
- 7月 ～勉強会資料作成
- 8月 勉強会開催
- 9月 腰痛調査に基づいてスタッフの日替わり担当を調整
福祉用具の検討・購入
- 10月 当スタッフによる実技VTRの作成（スタッフと協力）
小グループ（1グループ4～5名）選定
- 11月 スライドボードの効果的な使用方法を伝える



勉強会の実施



「**ノーリフティングケアの目的**」

労働安全衛生の取り組みであり安全で働きやすい職場を作ることが目的

「**新・腰痛対策予防指針**」

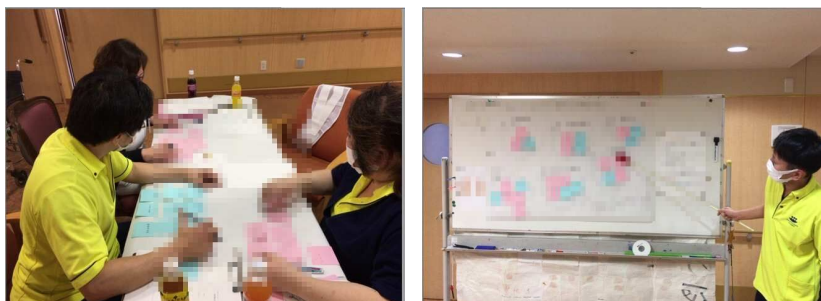
「人力での抱え上げは、原則行わない。リフトなど福祉機器の活用を促す

**腰痛を引き起こすようなケアをしない
対象者の二次障害を引き起こすようなケアを廃止する**

そのために

「働き方を変える」という意識を持つことが大切であることを説明した

リスクマネジメントの勉強会



- 既存の報告書の内容見直し、ノーリフティングの観点を加えるリスクマネジメントの理解を促し、リスクの芽の抽出を気軽にするための体制を整えた

職員教育用動画の作成

9月～10月実技講習に参加した2名が内容を復習し現在内容を周知するための動画作成

吉井	山本	主税	吉田
坂本	渡邊	一井	江藤
山下	長倉	浦濱	久保
	今福	田中	西本
		井上	



ノーリフティング1



ノーリフティング2



ノーリフティング振り返り



ノーリフティング確認



ノーリフティング体位交換

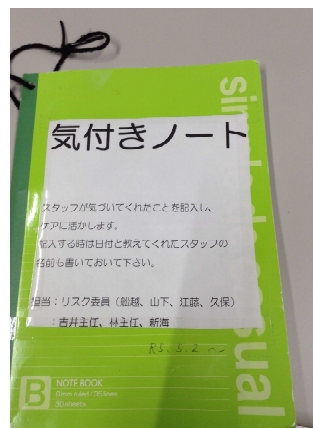


ノーリフティング立ち上がり

スタッフを4グループに分け、リーダー・サブリーダーを決定した。

パソコンのデスクトップに貼り付け全スタッフが何時でも閲覧できるようにした。

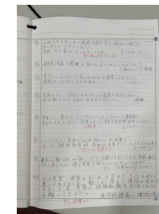
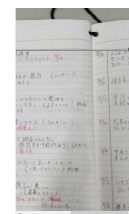
情報の共有化



全職員が周知しやすいリスクの抽出方法を検討した。

抽出期間を持って抽出したものを全職員に周知しリスク内容を精査し優先順位をつけて見直しを行った。

- ・ 6か月間抽出件数 **225**件
- ・ 精査処理件数 **162**件



スタッフ全員にどんなことでもよいので記入を促し、委員にて毎日確認した結果、様々な意見が抽出し共有した。

数カ月経過しそれぞれの意識の違いが明らかに

委員会

- ノーリフティングケアを推進する
- 職員の腰痛の予防
- 入居者の安全
- ノーリフティングケアの思考を落とし込む

上記の件はグループで時間をかけて共有していくこととした。

現場

- 時間に追われている。
- 人手が足りない
- 身体の使い方が分からない
- 以前からの対応のほうが早く出来る。

現場でみられた変化

① ベットの高さを、腰に負担が少ない位置まで上げて、ケアを行うようになった。

② 興味を示すスタッフがみられた。

③ 状況に合わせて2人介助で行い互いに声を掛けるようになった。

④ 気付きノートを活用し多くの意見が集まった。



ベッドの高さは拳(こぶし)の位置へ。

腰痛調査結果への対応

腰痛の調査を行い、業務内容の調整や受診を勧める等の対応を行った。

【対応の例】

① 腰痛愁訴者の担当業務の変更

腰痛があるスタッフが入浴介助の係であったため担当を他のスタッフと交代し、なるべく腰に負担が掛からない業務内容に変更した。

② 重症化予防

腰痛が強いスタッフには病院の受診とコルセットの使用などを勧めた。

(隣接する系列病院のリハビリスタッフと連携し対応検討した。)

③ 作業姿勢改善指導

施設のPTより動きや姿勢などのアドバイスをもらった。

腰痛の調査

委員会メンバーでの腰痛アンケートを行い集計結果の分析し、全職員への結果の周知と傾向の説明を行う

痛み程度	担当者
痛み特大	吉田
痛み大	江藤
痛み中	船越 田中
痛み小	主税 西本
痛みなし	新海 山下

腰痛チェック表の作成
(リスクボード)

日	担当	担当	担当
12月1日	吉田	江藤	船越
12月2日	田中	西本	山下
12月3日	新海	主税	船越
12月4日	江藤	吉田	田中
12月5日	船越	田中	西本
12月6日	西本	山下	新海
12月7日	新海	主税	船越
12月8日	船越	田中	西本
12月9日	西本	山下	新海
12月10日	新海	主税	船越
12月11日	船越	田中	西本
12月12日	西本	山下	新海

勤務分担表 (日替わり担当)

アンケート集計結果の各視点からの意見交換が不十分なため今後計画的に日程を決め実行していくこととした。

今後の課題

限られた人数で「いつでも」「誰でも」「負担の少ない」同質のケアを提供できる

① 実技指導とサブリーダー育成

グループ分けを行いサブリーダーを選出したが指導出来ていないため、サブリーダーを早期育成し、全体の育成を速める。

② マイクロブレイク体操またはガンガン体操 (がんがんやる体操)

腰痛予防のための体操を日勤者全体 (1回/日) で考えていたが、全体での体操は困難なため、隙間時間 (リラックスできるマイクロブレイクタイム) を活用できる体制を整えながら、継続・定着を目指す。

③ スライディングボードの使い方

スタッフの3割程は正しい使用が出来ているが、使用方法に自信がないと声も上がっていたため個別育成し安全に努める。

④ ノーリフティングケアの浸透度

当初と比べて意識はあるが抱え上げケアが散見されるため、①で述べたサブリーダーを育成し、グループで共有することで定着率を高める。

⑤ 気付きノートの活用

今後も気づきノートを活用して、小さな課題でも見つけて解消に向けて取り組んでいく。